

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 沈 池娟

本論文は、島村抱月の演劇活動を中心に、それ以前の文芸活動にまで遡り、作品の中の女性像を整理して、その特色について分析・検討を試みたものである。論文の構成は、序章に続き第一部「新聞小説「其の女」の濱子」、第二部「文芸協会『人形の家』のノーラ」、第三部「芸術座『復活』のカチューシャ」、最後に終章が付く。

序論では、先行研究を「島村抱月論」「比較文化論」「女性学の視座」と三つに分類、その中から「人生の真」を追求する抱月の美学的な根拠、演劇活動における「二元の道」と文芸作品における「二元の調和」、この二つの概念に注目、以下、本論文はこの二つの視点を中心に論じられる。

第一部は、第一章「文芸家・島村抱月の誕生」第二章「新聞小説「其の女」における女性像」の二章からなる。「其の女」は英国の小説『The Woman Who Did』の翻訳（翻案）である。主人公濱子は法的な結婚制度を拒否し、「朋友」として結ばれる「自由結婚」を貫き、経済的にも自立する「職業婦人」であった。濱子の生き方を通して、抱月は女性の自己解放と自立の問題を提起した、と結論付ける。

第二部は、第三章「島村抱月とイプセン」第四章「文芸協会『人形の家』上演」の二章からなる。『人形の家』の上演に際し抱月は、前半の二幕のノーラを現実存在する「無邪気な若い女」、後半のノーラは自立を図り目覚めた「新しい女」とした。二つに分けたその理由は、普通の主婦が覚醒して自立を目指す、そのプロセスを重視したもの、と推定する。

第三部は、第五章「島村抱月の演劇観と『復活』」第六章『復活』のカチューシャ像とその反響」の二章からなる。抱月版『復活』は、アンリ・バタイユ脚色『レサレクション』の翻訳に脚色を施したものである。『レサレクション』は、主人公をトルストイ原作のネフリュドフからカチューシャにした、メロドラマであった。抱月は、二人の出逢いを「夢の場」にして甘美な純愛のドラマを際立たせるとともに、後半には「カチューシャの精神的な復活」を描いていると指摘、『復活』の成功により「芸術と経済」の「二元の道」が実現されるに至った、その過程が解明される。

終章は、抱月以前の「新しい女性」の系譜をたどり、抱月が描きだした濱子、ノーラ、カチューシャ、この三人の女性の特色を恋愛と結婚、自立の観点から整理して、本論文の結論とした。

これまでの文学研究の成果を踏まえ、演劇活動で提起された女性の「結婚と自立」の問題は、演劇活動以前の文芸作品の中に胚胎していたことを検証した点が第一の研究成果である。俳優の演技や音楽、美術などの表現に関する分析が今後の課題として残されたものの、小説と戯曲、英語、仏語、独語、露語の翻訳（翻案）の過程を解析したことも評価に値する。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。